

木工研究会 椅子講習会 中国の椅子とH・ウェグナー

開催日時：2016年11月19日（土）13時から17時まで

会場：松本市 長野県工業技術総合センター

報告者 山本 俊一

講師 財満やえ子氏 島崎信氏

参加者30名、若い人多い。乳呑み児を抱えた若い夫婦には、驚き。残念ながら木工会からは、僕一人だけ。寂しい限り。

* 谷会長挨拶

島崎先生によると世界の椅子の源流は、4つあり 1、ウィンザー 2、シェーカー 3、トーネット 4、中国の椅子 ということで、今回、中国の椅子の歴史を財満先生に、その後にはハンス・J・ウェグナーと交友があった島崎先生に、特に明時代の椅子とウェグナーとの関わりを話していただきます。

その後、6月の名古屋での木工家ウィークでの課題、折り畳み椅子とスタッキングチェアについてのお話をいただきます。

1、中国の椅子の歴史について 財満先生

2年前まで東京造形大にて教鞭をとっていた。「木の文化フォーラム」の事務局も務める。住宅・家具のデザインをやってきて、住まい方のデザイン、座り方のデザインを考える様になった。ライフスタイルをどうしようか？とか、もう少し長いスパンで考えなければと思うようになり、海外にも出向き研究。生活文化の歴史、上下分離洋風化の日本のスタイルは、どこからきたのか？ということで20年前に中国の家具文化を研究。

中国の家具の分類 1、しょうとう類（背もたれのある、ないスツール等）2、たくあん（卓・案）類 案というのは卓とは違うテーブルの事 3、しょうとう類（ベット・ベンチ）4、きか類（チェスト・棚・台）5、その他（お盆・厨子・ジャン李朝の家具）に分けられる。

戦国時代 BC5～3世紀 お供え物をのせる台（案）幅70～80センチ、奥行40センチ、高さ10センチぐらいのものが発掘されている。アンペラ（敷物）の上に座る。

漢の時代 BC2～AD2世紀 「しょう」という、並んで座れる台の様な物（高さが出てくる）。その当時まだ紙が無く、木簡とか硬いものを書いていたので、机ではなく、前にもたれかかる台の様な物があった。6世紀に仏教がインドから伝わる。アレクサンダー王（アレキサンドロス3世）の大移動に従軍していた兵士が、住みついてパルティア後のクシャーン朝ペルシャの文化に影響を及ぼす。ギリシャ文化との融合（ヘレニズム文化）し、仏教を具現化した。ギリシャの運びやすい折り畳み式の椅子も伝わった。（胡の国）

魏晋南北朝時代 AD4～5世紀初めて椅子に座るようになる。正座が正式な座り方であったが、胡坐（あぐら）も混用

五代十国時代（907～960）10世紀になり、室内空間が充実してくる。テーブルも高くなり、「しょう」も大きくなり、家具の存在が大きくなる。

日本では仏教伝来。遣隋使5回・遣唐使14回。宗派が伝わるごとに胡床が入ってくる。(空海 真言五祖像を持ち帰る)しかし、椅子の使用は全体化されずに限られた中(寺院)だけで使用していた。正倉院の南倉にも残っている。寝殿造で部屋が無く、靴をはいたまま「トン」に座っている。禅宗の円覚寺仏光図師無学祖元座像 座が高く、脚置き必要。SH 48センチ

書院造の源流 慈照寺同仁齋。二条城二の丸御殿上段の間は書院造の完成形(現在の住宅スタイルの原型)。また、同様に住職の居室である方丈のスタイルも確立。違い棚・貼り付け壁、机が張り台として造り付けで、家具は存在しない。

また、中国に戻って宋の時代(960~1279)海外との交易が盛んになり、唐木も入ってくる。屏風形式から壁ができて、部屋になる。ガンダーラ文化の影響で湾曲したカブリオレの椅子とテーブルの生活。床が煉瓦で冷たく、椅子には脚置きが、必要になり座が高い。

明の時代(1368~1644)益々経済発展。官僚制、科挙制度。椅子は権力の象徴となり、「官僚の帽子椅子」また、次のウェグナーにつながる蹄鉄椅子(圈椅ファンイ)が普及した。

歴史の中で民族の移動、文化の交流があり、最近の中央アジアに行っても、今なお中国の家具の影響が見られる。広い視点で家具のデザインを考える必要がある。

2、明代の椅子とウェグナー 島崎先生

ハンス・J・ウェグナーは、1914年 ドイツ(当時)南ユトランド トゥナー市生まれ。父は靴職人で町議会議員。14~18歳家具職人の元で修業。マイスターの前段階の資格を取る。兵役のため大都市コペンハーゲンへ。23歳のとき、美術工芸学校に入学。ボーエ・モーエンセンと同窓。1938年卒業。モーエンセンは王立アカデミーへ、ウェグナーは、アルネ・ヤコブセンの工房へ。島崎先生は1990年ごろウェグナーを取材。当初、オーレバンシャー1944年出版の「世界の椅子」の中の明代の椅子に影響を受けたと言っていたが、1943年にチャイニーズチェアが作られるので、おかしくて実は勘違い。結局、1938年同じくオーレバンシャー出版の「家具のスタイル」の中の2枚の明代の椅子の写真(ファンイ)を見て、インスピレーションが膨らむ。モーエンセンもシェーカーの家具の影響を受け、国民的椅子J39を生み出す。ウェグナーは独立して多少焦りもあったかも知れない。

コピーするのは、デザインの常套手段、現に昨年王立アカデミー美術館では「日本から学ぶ」と題して、1880年からの日本のデザイン2万点を展示している。過去にある椅子を見て、今日の感性と自身の技術を加味して、次の新しいものを見出す力が無ければできない。まずは色々吸収しないと、自分のオリジナリティーは生まれない。職人時代に培った技術と感性、工芸学校での学び、日々の努力なくしてチャイニーズチェアは生まれなかった。リデザインは、生易しいものではない。

武蔵野美大には、40年前から約400脚の世界の椅子のコレクションがある。明代の椅

子は3種類、これは1985年中国の家具学会の金氏にレプリカの製作を依頼してできたもの。

チャイニーズチェアはカール・ハンセン&サン社が、後にPPモブラー社が製作。初めはマホガニーでつくるが、後にチーク材。技術力により、デザインも決まってくる。

ウェグナーは、生涯500脚をデザイン。そのうち商品化されたのは、60脚程。日本では特に「Yチェア CH24」が有名。1952年に一部紹介され、1962年から販売。「Yチェアの秘密」は誠文堂新光社から発行の本に詳しい。著者はカール・ハンセン&サン・ジャパン支社でYチェアの販促・商品管理をしていた坂本氏とお馴染みの西川氏共著

3、木工家ウィークの「木工家がつくる椅子展」のテーマについて 島崎先生

1回目 与えられた空間に自分が使う場合にどう考えるか？使い手の立場、視点、心理、に立って考えられた椅子。

2回目 異素材を組み合わせた木の椅子。

3回目 高齢化に伴い、膝に優しい椅子。

4回目のテーマは折り畳み椅子とスタッキングチェア。

折り畳み椅子（フォールディングチェア）について

針葉樹の家具について、主要産地 秋田スギ・木曾ヒノキ・四国の梁瀬スギ、そして、九州の日田スギ。アオヤギ製作所が、アルミとスギで折り畳み椅子を製作。JISの試験・検査もクリアした強度と耐久性。寸法精度とメカニズムが求められる。

折り畳み椅子を類別すると、1、前後にたたむ。2、左右にたたむ。3、中心に向かってたたむ。4、変な物？に分けられる。

1、折り畳み椅子の原型的存在。イタリア ジャンカルロ・ピレッティ 1969年 PLIA（プリア）アルミとセルロースで出来ており、一本の線になる。真ん中の丸い金具がポイント。スタッキングも可能。ドイツ エゴン・アイアーマンのSE18、川上元美氏のブロンクス1010などがある。中国の椅子、日本に伝わった胡床もこのタイプ。運び易さ。

2、背もたれと座板をどう収納するかが、問題。布・革張りが多い。新居 猛氏 ニーチェア 世界の名作イスの一つ。元は、柔道着、剣道着を製作。戦後、作れなくなり、輸送費を安くするために、荷姿をコンパクトサイズにする。

3、バギーチェアが代表

五分の一の模型を作り、動きを確認することが大事。ヨーロッパの工房では、アルミ・真鍮で金具を作っていた歴史がある。

スタッキングチェアについては、時間切れとなる。

以上

ウェグナーデザインのチャイニーズチェア

中国明代の椅子など

